

小川未明文学館 館報

第七号

小川未明文学館

vol. 7



小川未明文学館

新潟県上越市本城町八一三〇(高田図書館内)

TEL 025-1523-11083

FAX 025-1523-11086



「童話の楽校」に参加した子どもたち

さまざまな形で未明童話に触れることで、子どもたちにその魅力を感じてもらおうと、24年度から始まった「童話の楽校」。これからも多くの作品を読み続けていってほしいと願っています。

「自分はいつまでも子供でありたい。たとえ子供でいることができなくても、子供のように楽しい感情と、若やかな空想をいつまでも持っていたい」と第二小説集『緑髪』に書いた、未明の想いを継ぐ子どもたちです。

目次

小川未明文学館 館報 第七号

二〇一三年五月三十一日発行(年刊)

【寄稿】

佐々木赫子

「牛女」から見えてくる小川未明」

2

【報告】

文学館一年の記録(平成二十四年度)

4

謙信KIDSスクールプロジェクト「童話の楽校」

7

文学館講座

8

所蔵品紹介

12

【小川未明文学賞】

【ボランティアネットワークだより】

13

「のばら vol.9」

14

【文学館からのお知らせ】

16

「牛女」から見えてくる小川未明

佐々木 赫子
かくこ
 (児童文学作家)



小川未明の作品で普通最高傑作とされるのは「赤い蠟燭と人魚」だが、作者が自分をさらけ出しているのは「牛女」の方だと思う。「牛女」は口のきけない「牛女」というあだ名の女が病死後、幼い我が子を案じて、冬には雪山に黒い影となって姿を現す話である。子どもは成長すると南の方へ行つて金持ちになって帰り、故郷で林檎栽培を始めるが果実は収穫前に落果してしまう。古老の意見をいれて亡母の法事を営んだところ、果実が育つて、裕福な農家になる。

「牛女」が雑誌に発表されたのは一九一九年。初出から三〇年近く経つて、筆者は八歳の時、家にあった古い改造社版の現代日本文

学全集で初めて読んだ。その時は牛女の哀れさが強く印象に残った。

その後さらに三〇年経つて読み直す機会があった。大人読者として因果応報めく結末に不満を抱いたが、作者の声が聞こえてくる気がした。それから何かの折に「牛女」をしばしば読み返したが、作者その人については「日本の童話の先駆者」という程度の認識しかなかった。それがある時、人が「未明は故郷にあまり帰らなかったらしい」と言うのを耳にして、作者のことが知りたくなった。

未明が「あまり郷里に帰らなかった」のは、地理的遠さや経済的事情で帰れなかったからか。それとも帰りたくなかったからなのか。砂田弘の『評伝 小川未明』にもそのことは何も書いていない。

すでに指摘されているかもしれないが、未明は作品の多数で「南」を肯定的イメージ、「北」を否定的イメージで捉えている。

「野薔薇」の戦争は北の地で戦われ、北国の若い兵士は死に、生き残った老兵は平和な南へ帰つてゆく。「月と海豹」の海豹が「死んだ魚の眼のようにどんより曇つた北方の凍つた海」で行方不明の我が子を思つて嘆いている同じ時、いつも花が咲き乱れている暖かな南方の野原では人間の若い男女が唄い踊る。「港に着いた黒んぼ」の白鳥は北の海で子を失い、南の島で目の見えない少年に小さな幸せを取り戻させる。さらに言えば、都会の豊かさや西洋文化は国境の南に集中している。「赤い船」の少女達が憧れるオルガンや音楽は、東京の南の太平洋の向こうの国から来たものである。「小さな針の話」の若い教師は都会へ出て出世し、「牛女」の遺児も南の土地で成功する。

反対に北国の海辺の町では、「赤い蠟燭と人魚」の老夫婦が金に

目が眩んで、慈しみ育てたはずの人魚の少女を、彼女の哀願も構わず売り飛ばす。北の海辺の町を消滅させる結末に、信頼を裏切る者への作者の憎悪が示されているが、〈北の町〉への憎しみとも思える。

略年譜を見ると、未明は高田中学を数学の進級試験に三回落ちて中退している。旧制中学校は五年制で、落第を二度までしか認めないのが普通だった。男子の中等学校進学率五・一%の当時、県下有数の進学校を退学させられた噂が狭い町に広まると、進学できない絶対多数層の「ざまみろ」という鬱憤ばらしの種になったであろう。未明の傷心に追い打ちをかけて皮肉や嘲笑を浴びせた者もいそう

だ。
未明の数学嫌いは、一七歳で投稿した漢詩が中央の雑誌に掲載されるほど突出した文才と、対極をなすものである。後年の方角の好みと同じ極端さが、この中学時代に芽生えている。現代なら「個人的」と言ってしまうことも、当時は致命的欠陥と見做された。官学（公立校）は各教科を平均的に習得させ、バランスのとれたいわば無難なエリートを養成する教育機関だった。世間の目にも未明自身にも、そのコースからの脱落は恥であり、社会的落伍と映って当然だった。立身出世主義が支配的価値観だった時代、自分の性格や能力の偏頗を意識する未明は、世間から認められて以降も自尊心と不全感の間を揺れ動いて、常には平穏でいられなかったのではないだろうか。

上京して早稲田大学の前身の専門学校に入った未明が、屈辱の記憶著しい故郷には帰りたくないと思っても、不思議ではない。作中の〈北方〉嫌いは〈故郷〉嫌いの同義語でもある。

「牛女」は作者のうしろめたさが書かせた作品と思われる。南へ行って成功する牛女の息子は未明自身だ。未明は貧窮の中でも郷里

の親に仕送りを続けているが、内心はすでに故郷と親を捨てていた。牛女の息子が村人に「お札を言わなければならぬ」と帰郷するのは、作者の義務感の表明である。林檎栽培のつまずきは作者の自罰を意味する。青いまま落果する林檎は、栄養失調が遠因で病死させてしまった我が子二人であり、内心の忘恩が天罰をうけたと感じる悔恨の象徴だ。若かった時分の筆者には不満だった〈亡母の供養でめでたしめでたし〉の結びも、略年譜でこの作品発表の前年に二人の子が死んでいることを知ると、幼くして死んだ子等を悼み「せめて死後の世界で魂に平安であれ」と願う作者の祈りだと理解できる。

作品は虚構の産物だが、作家の真実を語りもする。



「牛女」初出
「おとぎの世界」第1年第2号

1919年5月 文光堂

◆文学館一年の記録◆

朗読研修会

3月30日・4月20日・5月25日
参加者各回 29名

📖 橘 由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研修会を開催しました。研修会では、発声練習方法や朗読の基礎などを学び、未明童話「月夜と眼鏡」「野ばら」で実践的な朗読を行いました。



特別展

安西水丸が描く「赤いろそくと人魚」

10月6日～11月11日
来館者 4283名

📖 未明の代表作「赤い蠟燭と人魚」は、発表から90年以上にわたって多くの画家たちに描かれてきました。未明生誕130年のこの年、イラストレーター安西水丸氏が独自の感覚で絵本にした原画を展示しました。
会期中、特別展おはなし会、手づくり絵本のワークショップなどのイベントを行いました。



1年生からよめる日本の名作絵どうわ
『赤いろそくと人魚』岩崎書店
宮川健郎／編 安西水丸／絵

手づくり絵本のワークショップ

10月8日
参加者 28名

📖 手づくり絵本 木いちごの会にご協力いただき、未明童話「おほしさま」を題材に、仕掛け絵本を作るワークショップを開催しました。はじめに作品の朗読を聞き、お話の世界に親しんだあと、折り紙やモールなどいろいろな素材を使って、楽しく絵本を作りました。



朗読交流会

10月13日
参加者 42名

未明ボランティアネットワークと、ぐんま朗読塾の皆さんによる、朗読交流会を開催しました。ぐんま朗読塾は未明作品「島の暮れ方の話」「抜髪」のほか、「智恵子抄」や金子みすずの詩の朗読を、未明ボランティアネットワークはオリジナルの映像と音楽にのせて「二度と通らない旅人」を発表しました。

その後、お互いの朗読についての意見交換会を行いました。



特別展おはなし会

10月28日
参加者 36名

未明ボランティアネットワークの5つの会が合同で朗読会を開催しました。未明童話「ものぐさじじいの来世」、「ある男と牛の話」、「負傷した線路と月」、「研屋の述べ」、「羽衣物語」を、自作の映像や音楽、ペーパークラフトなどを使って発表しました。



童話創作講座

10月7日・11月23日（入門コース）
10月20日（実践コース）
参加者 11名

上越市在住の児童文学作家 杉みき子さんを講師に、入門コースと実践コースに分かれて短篇童話の書き方について学びました。入門コースでは、まず講義を受け、その後書いた作品の講評を受けました。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや図書館で読むことができます。



文学館講座

10月21日・11月26日・12月2日
参加者 各回30名

未明や特別展にちなんだ3回の講座を開催しました。講師は、第一回宮川健郎さん、第二回土居安子さん、第三回小笠裕二さん。参加者からは、「3回とも、それぞれ講師・内容ともに特色があり、勉強になった」、「未明の人間像を知る手がかりとなり、作品を読むために参考になった」といった感想が聞かれました。（詳しくは文学館講座の記録の頁をご覧ください）



第二回

第21回 小川未明文学賞贈呈式

3月24日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちに心に夢と希望を育む」ことを目的に平成4年から募集している第21回小川未明文学賞の贈呈式を文学館で開催。大賞は浅野竜さんの「木かげの秘密」、優秀賞は島尻勤子さんの「くすぐりの木」と「しめ殺しの木」、うのはらかいさんの「じいちゃんが花をうえた日」でした。文学賞の頁で、大賞の浅野竜さんの「受賞のひとつ」を紹介しています。

また、未明生誕130年を記念して開催した、上越市内の小学5～6年生を対象とした作文コンクール「野ばら賞」の贈呈式も行われ、次の方が受賞しました。

市長賞 里公小学校5年 金井萌花さん

「赤いろうそくと人魚」

教育長賞 上越教育大学附属小学校6年

中尾渚さん

「小川未明さんの作品にふれて」

小川未明文学賞委員会会長賞

上越教育大学附属小学校6年

齋藤綾香さん

「小川未明さんの作品にふれて感じたこと」



文学賞贈呈式



野ばら賞贈呈式

文学館おはなし会

毎月第2・第4日曜日

「未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力で、月2回のおはなし会を開催しています。24年度は21回で308人の皆さんに楽しんでいただきました。」

出張おはなし会

「未明作品に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力で、出張おはなし会を開催しています。学校や福祉施設など、24年度は40カ所(2302人)を訪れました。」



文学館所蔵品紹介

「24年の秋から、小川未明顕彰委員会の協力で、文学館の所蔵する、未明に関する貴重な資料を順次紹介する展示を開始しました。今後、文学館の意義や役割を皆さんに知っていただき、さらに利用していただきたいと考えています。24年度は、第8回目までを展示し、多くの方に足をとめてご覧いただきました。」



謙信KIDSスクールプロジェクト

童話の楽校

〈開催日〉

- 第1回 10月14日
- 第2回 11月11日
- 第3回 11月25日
- 第4回 12月9日

〈参加者〉 小学1～3年生 18名

未明の童話にふれ、その作品世界を体験し、豊かな心を養ってもらうことを目的に、24年度から、謙信KIDSスクールプロジェクト「童話の楽校」を開催することとなりました。対象は小学1年～3年生で、18名が参加しました。

第一回

小川未明文学館と高田図書館を探検しよう

まずは子どもたちに、小川未明が何をした人か、どんな人だったかを知ってもらうため、写真や図を使って説明しました。その後、文学館ではおはなし会を聞き、しかけや影絵で遊んで、文学館を体験してもらいました。図書館では、未明童話が集められている書棚を見たり、図書館職員から本の探し方や借り方を教わったりしました。

感想「たくさんのお話を聞いて楽しかった」「きょうだいのねずみ」がと

くにおもしろかった」「書庫に行けてよかった」



第二回

未明童話にふれよう

未明の代表作「赤いろうそくと人魚」のDVDを鑑賞し、この物語の最後に人魚が何を思っていたかを、絵で表現しました。悲しみ、怒り、喜びなど、自分が考える人魚の気持ちを、塗り絵や貼り絵、折り紙やモール等で、思い思いに描きました。

感想「人魚は売られてしまって、とても悲しかったと思うけれど、最後はお母さんに会えたかもしれないので、うれしかったのではないか」「怒ったお母さん人魚が、海を荒れさせて助けてくれたのだと思う」

第三回

未明童話の主人公になろう

大阪国際児童文学館の土居安子さんを講師に、未明童話を声や体を使って表現し、物語を体験するワークショップを行いました。最初に、それぞれが違う動物になって行動し何の動物か当てるゲームで緊張をほぐし、続いて「山の上の木と雲の話」を題材にして、物語体験をしました。風や木、鳥や雲になりきった子どもたちは、のびのびと楽しそうに活動していました。

感想「いろいろな役ができたし、風になったり木になったりできて、うれしかった」「いろいろな動物になったことがおもしろかった」



第四回

未明童話の絵本をつくらう

前回体験した「山の上の木と雲の話」を思い出しながら、絵本をつくりました。体験したシーンや、好きなシーンを選び、オリジナルテイあふれる作品に仕上がりました。

感想「絵本作りは大変だったけれど、工作みたいで楽しかった。ツグミを描くのが大変だった」「上手にできて良かった」



文学館講座

平成24年度の文学館講座は、それぞれに特色のある3回の講座を開催しました。ここでは講座内容の一部をご紹介します。

第一回

「日本の児童出版美術の流れと小川未明」

（講座内容抄録）

10月21日（日） 宮川健郎氏

（武蔵野大学教授）



今、特別展で安西水丸さんが描く『赤

いろろそくと人魚』の原画展をしています。これが、これはつい最近、十一日前に、一月一日の奥付で出た本の原画です。私が岩崎書店編集部と一緒に企画・編集をした「1年生からよめる日本の名作絵どうわ」の一冊で、このシリーズの一つの大きな狙いは、これは「絵本」ではなくて「絵童話」だということ。このことが、私はとても重要だと考えています。では改めて「絵本」とは何か、「絵童話」とどう違うのか、そこを少し確認させていたいただきたいとします。『赤いろろそくと人魚』はもともと、『東京朝日新聞』に連載された、言葉で展開する童話です。言葉によって子どもたちに作品を届ける童話と、絵本とは、大きく違ったメディアだと考えています。簡単に言うと、絵本は見開きの絵が様々なことを語る。言葉は、あつたとしても手助けです。ページをめくっていくことで展開をしていく、そういうものが絵本だと思えます。ほとんどの大人は、童話なし児童文学の本と、絵本というのを混同しています。特に幼年期の童話の本にはたくさん絵が入っていますので、絵本と混同するのもしかたないかもしれません。いい絵本というのは、絵をめくっていくとストーリーがわかる。もちろん言葉がそれを手助けしているのですが、絵が語る。それが大きな特色だと思えます。なおかつ、絵本というのは同時に、ページをめくっていくという仕組みもあります。松谷みよ子さんと瀬川康男さんの『いないいないばあ』は、本の形をしていて、めくられるという仕組みが、鮮やかに作品を作っている例だと思います。めくっていくことで展開していくという

仕組みを、絵本ははつきりともっている。絵が語る、絵の本であること。それは言葉というよりは視覚的なものが語られる、ということになります。それから、本の形をしてめくられるということ。展開をしていくということ。それはいわば本というものが一種の工芸といえますか、ものの形をした芸術だとすると、視覚的で工芸的なものとしての絵本というものがあると思えます。ところが童話や児童文学の本というのは、それとは違う。実際にはたくさん絵が描かれていたとしても、その絵を全部はさしてしまつて、なおかつ本の形ではなくとも読めるもの。特に幼年読者のための本は、親しみやすくするためにいろいろな絵がついていいますから、見かけは絵本と似ていますが、本当は絵がまったくなくても、本の形をしていなくても、成り立つのが童話や児童文学です。そういうふうを考えていくと、その違いはかなり大きいと思えます。絵本の場合は、まったく言葉がなくて、絵だけでも成り立つてしまうことがあります。たとえば姉崎一馬さんの『はるにれ』という写真絵本は、まったく言葉がない。でもここに言葉がないから、ここには物語がないかということ、そんなことはない。絵本というのがある極まったところになると、この作品に見られるような、絵が語る、もう手助けの言葉も要らない、めくっていくことで展開して、でもそこに物語はあるというふうな、そういうものになっていくんだと思います。絵本というのは言葉がなくても一冊成り立つことがあり得る、ということ。これを考えると余計に、童話とは違うものだとということになります。ところが今現在、も

とも言葉だけで成り立つはずの童話や児童文学を絵本にする、ということが多く行われています。言葉だけで成り立つものを、絵本という仕組みの中に変換して流し込んでいくのは、本来のことではないんじゃないかなという気がするんですね。本来絵本の文章というのは、あまり長々しくなくて、本当に手助けという感じである方がいい。ですから、今回作ったシリーズの「絵童話」というのは、絵本の仕組みを持つものではなくて、あくまで「さし絵」です。さし絵は、言葉の手助けとして絵が役立つということ。絵本は、絵が語り言葉が手助けをしますが、絵童話は、言葉で語り絵が手助けをします。あくまで言葉で語られていくものを生かす、そういうつもりで作ったので、絵本とは違う絵童話だということ。を言っておきたいと思えます。

安西水丸さんの絵は、酒井駒子さんやいわさきちひろさんの絵本の『赤い蠟燭と人魚』とは、また印象が違ふと思えます。特に酒井さんのものは、暗い、あるいは黒い印象ですけれども、安西さんとはとても白い印象。酒井さんで『赤い蠟燭と人魚』はひとつ形をもったようなところがありませんが、今回私はある種の解放感みたいなもの、形が決まったものから解放されるような感じを味わいました。安西さんの絵は娘の人魚がとてもかわいらしくて、でもちよつとはかなげで寂しい感じがよく描かれているなと思いますし、この作品の子どもへの手渡し方というのが、ひとつ豊かになったのではないかと感じています。

子どもの本は、もちろん子どもが読者ですが、そこに様々な形で大人がかかわ

ってきます。その中で、名作童話といわれる過去の古典的な作品の手渡し方という問題についてお話しします。子どもの本の流通は一般の本と違い、親が本屋さんで子どものために買ってあげる、公共図書館や学校図書館で本を買い揃えるなど、大人が買って子どもが読むという形が一般的だと思います。子どもの本の読者はもちろん子どもが中心ですが、それを買うのはむしろ大人なんです。子どもの本が子どもの読者に届くまでの間に、それを買ってあげる大人というのがいつも存在するという、そういう構図になっている。このことは、子どもの本における「顧客の二重性」という言葉で語られることがあります。児童文学評論家の菅忠道かんただみちさんが一九四〇年に打ち出した、子どもの本の場合は、読む層と買う層が別々で、結果的には顧客が二重になっているという考え方です。大人はただ買ってあげるだけではなく、子どもと本を積極的に結びつける。これは良い本だから読みなさいと積極的に結びつけることもあり、子どもが買ってと言った本をあまり良さそうではないから買わないという、逆に子どもの本と子ども読者とを遠ざけるということも同時に起こるといって、両面を持っていると思います。では大人たちはどういうふうに、子どもの本と子どもの間に立ってふるまえばいいのか。児童文学というのは必ず、大人が書いて子どもが読むものなんです。子どもに向けて書くものですか、子どもに寄り添った表現でなければならぬ。自分の思いを自分の言葉で書こうとすると、子どもには届きづらいというよう

な矛盾があると思います。戦後このような観点の中で、小川未明は子どもには通じない、ということを言われたと思います。この矛盾をなんとかできる人はやはり子どもの身近にいる大人で、子どもには通じない言葉に、そばにいる大人がちよつと言葉を添えてあげる。そうすると、なんとか子どもに渡せたりすることがあるのではないかと思います。子どもの本と子ども読者の間にいる大人たちは、やはり子どもに作品の言葉を手渡ししていく手助けをする人たちでもあると思うんですね。ですから「顧客の二重性」の中の、買う層である大人たちのことを、私は以前から「媒介者」というふうに呼んできました。子どもの本がもとも矛盾する構図をもっているとする、それを何とかする大人たちという意味で、ちよつと期待を込めて呼んでいます。松谷みよ子さんの『アカネちゃんのなみだの海』という本の最初の話、「タツタちゃんとタアタちゃんの帰還」の結末で、語り手は最後に「え？ キカンっていうのはね、……」と「帰還」という言葉を説明してあげて終わるんですね。話の本体を語っていた語り手が、最後はまるで子どものそばにいる母親のように言葉の補足をし

てあげる。つまりこの語り手は最後のところで媒介者の役割を果たす「媒介者を仮装する」ということが起こっているんじゃないかと思えます。この作品の媒介者の仮装がヒントになりまして、古典的な名作童話を現代の子ども達に渡す時に、このような媒介者としてふるまうことができるのかと思ったわけです。つまり、今回の「1年生からよめる日本の名作絵どうわ」のシリーズには、おびただしい数の脚注がついているんですね。1年生にはわかりづらいような言葉には一通り注をつけています。これは、子どものそばで本を読んであげている大人が一言付け加えるというような役割を、あらかじめ本の中で果たしたいと思ったわけです。『赤いろうそくと人魚』の注では苦労したところもありました。1年生のつもりになってすべての言葉を検討して、難しいような言葉の意味を考えていきましたので、今回は本当に『赤いろうそくと人魚』をよく読んだと思います。1年生にもわかるように本を作っていくと、実は大人にもよくわかるんです。1年生という、言葉の上ではまだ発達が未熟な人たちにもわかるように作っていくと、世の中じゅうにわかるかなと思って、「物語のユニバーサルデザイン」と言っています。

本文そのものについてですが、今回の『赤いろうそくと人魚』は、ほるぷ出版の『日本児童文学大系』の小川未明の巻に載っているテキストをもとにしました。子どもの本の場合は、テキストを子どもにわかりやすいように作り変えるということがしばしばありますが、今回は三つのルールを設けました。漢字になっているものはできる限りひらがなにする。ひらがなのものを漢字に直すことはしない。元々の句読点は動かさない。これはなかなか難しく、脚注以上に苦しい戦いでした。

今回私は出版物という形で、未明というものを現代の子ども達に渡そうと試みました。小川未明文学館は、未明というたくさんの仕事をした人を現代の中で顕彰する、今の子ども達に渡そうとする、

そういう機能を含んでいる場所だと思えますので、重なるところがあるのかなと思いい、この話をさせていただきます。

第二回

「小川未明の物語世界を遊ぶ」

「作品選択・演出方法について」

11月26日(月) 土居安子氏

(大阪国際児童文学館主任専門員)



前日、「童話の楽校」参加者の子どもたちに、集団でこえやからだを使って物語を体験する演劇的なワークショップ、「物語体験ワークショップ」を行っていた。

ただいた土居さん。講座は、子どもたちと同じく、未明童話「山の上の木と雲の話」の物語体験をすることから始まりました。からだ全体を使って木や雲になった参加者からは、「未明作品を五感で味わうことができた」「演じるといって体験により、あらためて作品を見直すことができた」といった声が聞かれました。

その後、「読むということの楽しさの奥にある、物語のおもしろさを伝えたい。子どもたちにもっと、物語を読むだけではなくて、体でも楽しみながら、自分の中にある感情を出したり、自分ってこんなこともできるんだとか、こんなふうにも言えるんだ、という可能性のようなものを体験してほしいなと思った」という、このワークショップを行うようになった思いについて、続いて、ワークショップで使用する作品を選択する際の検討要素や、今回のワークショップの目的、また、数ある未明童話の中から、この作品を選んだ理由をお話いただきました。

目的

未明作品は、情景描写が詩的で美しく、情景をイメージしながら声に出して読むことで、その魅力を味わうことができる。また、ストーリーの中には、人間や自然のあたたかい交流が描かれている作品があり、それらの登場人物になってみることで、作品をより深く楽しむことができる。それによって、未明作品の魅力を体験することとする。また、ことばの力を体感し、参加者同士が未明作品を通してコミュニケーション能力を

高めることを目的とする。

作品とワークショップの内容について

この作品は、孤独で若い木がまっすぐ立っていると、女王のような雲がやってきて、あこがれの気持ちを抱き、その喪失感でつらい思いをするが、鴉や鶴に励まされ、美しい雲がやってくる夏の到来を待ち続けるという物語である。若い木の孤独、雲の美しさ、自由な鳥たちの様子が、短い作品の中にイメージ豊かに語られている。そこで、子どもたちは、未明の言葉が作り出すイメージに寄り添いながら、若い木の夏から次の夏までの経験を体験することとする。

起：若い木が山の上に一本だけ立っている

承：美しい雲との出会い

転：鴉と鶴との会話

結：一人で立っているながら雲がやってくるのを待っている

ワークショップでは、木をイメージするために、種から木になることとし、二人組になって、一人が主人公である木、もう一人が木と出会う風、雲、鴉、鶴になり、ストーリーを最後まで体験してから交代することとする。また、作品は冬で終わっているが、その後、若い木が、雲の来ることを夢見続けることを考え、最後は、雲とどのように再会するかを、それぞれが考えることとする。

① 導入

種から木になるイメージ

風の吹く中でじっと立っている

② 展開

〈夏の夕暮れ〉雲との出会い

〈秋〉鴉との対話

〈冬のはじめ〉鶴との対話

雪が降る

③ まとめ

〈春〉

〈夏〉再会のシーンを考えてみる

作品選択の理由

・主人公の若い木が、雲と鴉と鶴と出会うべく、出会いと別れという単純な私たちなので、小学校低学年でもできる。

・最後に、雲にまた会えるかもしれないという希望を残しているため、子どもたちが明るい気持ちになって終わることができる作品である。

・構成が、夏から秋、冬に入っていくという一年の時間の流れがあり、空間の移動がないので、イメージがしやすい。

また、ほかにどのような作品を、どんなふうにも物語体験ワークショップにしているかを、『だくちるだくちる』『漁師とおかみさん』（グリム童話）を例に、解説していただきました。

最後に土居さんは、「ワークショップにより、子どもたちと物語の楽しさを一緒に味わって、またそれが本を読む楽しさにもつながっていく。本だけではなくて、いろんなかたちで子どもたちが物語って面白いな、その中で自分ってなにかなのか、自分ってこんなふう感じていたらうれしい」「未明作品を地元の子どもたちが読むことは、作品を通して、自

分たちの日頃感じている、暮らしている地域の風景を言葉で獲得していくということからも意味がある」とお話しくださいました。

第三回

「未明文学における童話と小説の境界」

（講座内容抄録）

12月2日（日） 小笠原二氏

（上越教育大学教授）



未明生誕一三〇年にあたり、未明文学について関心を寄せてくださる方が多くなってきました。私は文学研究者として、未明の作品世界についてここ数年考えてまいりましたが、未明文学について

は、まずもって書誌的な整理が必要であると考え、このたび『小川未明全童話（人物書誌体系シリーズ）』（二〇一三年、日外アソシエーツ）という本を作りました。未明の童話一八二編すべてにあらすじをつけ、初出はいつで、どの童話集に収録されたのかといったことを調べ、各種、索引をつけたものです。

この仕事を通して、未明が書いた作品には、同じパターン、同じテーマの童話はなく、また読者も子供向けから大人向けまで多岐にわたって書き分けられていることをあらためて確認することができました。そのことをふまえ、本日、お話ししたいのは、大人向けの童話についてです。

書誌の本とは別に編んだ『新選小川未明秀作童話50 ヒトリボツチノ少年』（二〇一二年、蒼丘書林）は、昭和期の童話を中心に集めた童話集でした。この本には、詩的な作品を多く集めました。いわば童話と詩の間にある作品集といったおもむきのある本です。未明童話は「赤い蠟燭と人魚」や「金の輪」だけではない、この童話集に収められたような作品もあるということを伝えたくて編集しました。

本日は、詩に近い童話ではなく、小説に近い童話を五〇編選んでまいりました。今回、選んできた五〇編の、いわゆる〈大人の童話〉も、前著同様、これまであまり知られていなかった未明童話の別の顔―童話と小説の間にある作品集―を示すものとして、今後、刊行する予定です。

さて未明の書いた、童話と小説の間に

ある〈大人の童話〉を、内容から三つに分けてみましょう。一つめは、大正中期に書かれた、ロマン主義童話時代のもの、二つめは、大正後期に書かれた、社会主義童話時代のもの、三つめは、童話作家宣言後、昭和初年代に書かれたものです。

未明童話は、もともとその出発期においては〈大人の童話〉といえる要素を多く含んでいました。大正中期の童話雑誌「赤い鳥」発刊以降、芸術性の高い童話がたくさん作られるようになりましたが、それは子供にとって価値ある童話であるだけでなく、大人が読んでも価値のある童話として作られました。すなわち、大人の読者に成長とともに失った子供時代の価値を思い出させるものとして大正期の童話はあったわけです。

したがって、「赤い蠟燭と人魚」に代表されるロマン主義時代の未明童話は、全体として〈大人の童話〉と呼んでもよいわけですが、そのなかでも小説的要素を色濃くもった童話というと、当時、女性雑誌に発表された未明童話などは、大人の女性を読者として意識して書かれたことから、童話と小説の間にある興味深い作品といえるでしょう。二つめにあげた社会主義時代の童話は、第一次世界大戦以後深刻になっていく貧困や労働に関する大正期の社会問題をふまえ、社会改造を大人にうながす童話です。三つめは、〈童話作家宣言〉によって小説の筆を折った未明が、これまで童話で描いてきたテーマを、大人の読者を強く意識するなかで、童話形式のなかで創り上げた作品です。当時の二大政党の一つが

発刊していた「民政」という機関紙に毎月連載された未明童話の多くは、その確かな成果といえるでしょう。

未明は、〈童話作家宣言〉後の昭和初年代、童話というジャンルの中であらゆる内容を表現することに挑戦しました。童話の中で自分の言いたいことがすべて

言えるとして、幼年向けにはカタカナ童話やひらがな童話を書き、少年向け、少女向けの童話を書き分け、大人向けの童話を書きました。三つめにあげました〈大人の童話〉がもつ、童話の未来への可能性は大きかったと思いますが、昭和二年に日中戦争が始まったことでその可能性は潰れてしまっています。未明が昭和初年代に書こうとしていた〈大人の童話〉は、昭和三〇年代以降の児童文学の主題や題材の深まり、広がりを取り戻すものがあつたと思います。

ところで、〈大人の童話〉と区別しておきたい作品群があります。それは未明が大正後半期にしばしば書いた談話体の「です・ます小説」です。これは表現形式だけを見ると、童話に似るのですが、内容は大人の社会を描いた小説です。この小説群は、従来の未明の小説と同じ素材、いわゆる大人の社会の闇を書いたものです。未明は当時の社会問題を真正面から受け止め、それを小説化していくのですが、テーマそのものもつどうしようもない暗さと重みをいかに効果的に読者に伝えていくかを考え、談話体小説を書くにいたったと思われませんが、そこに、これまで書いてきた童話形式のスキルが活かされました。そしてさらには、小説的内容を童話形式のなかで書いてい

くこの談話体小説のスキルが、今度は昭和初年代になって、大人の読者のために書かれた童話に活かされていきました。

本日、紹介した小説的要素のつよい未明の童話群は、未明がとりわけ大人に読んでもらいたいと思つて書いた作品です。こうした作品は、童話雑誌というよりは、むしろ一般の文芸誌や専門誌に書かれたものですが、全集未収録が多いようです。今後、未明文学にもっと多くの光を当てていくためには、こうしたあまり知られていない、けれども重要と思われる童話を紹介していくことが大事だと考えます。

未明童話を概観しますと、童話から小説、詩、随筆等へジャンルの特性が移っているのが見られます。その中間形態的な童話は、ある一定数を占め、それらも未明童話の特徴を形づくっています。童話が越境を試みるとき、どっちつかずの曖昧な失敗作が生まれる場合もありますが、童話の新しい可能性が開かれる場合もあります。未明の童話を考えるためには、未明の小説を読まなければなりません。反対に未明の小説を考えるためには、未明の童話を読まなければなりません。そしてその中間形態的な作品に対する注目が必要です。



小川未明文学館所蔵品紹介

小川未明顕彰委員会の協力で、24年度から開始した文学館所蔵品紹介展示。その内容を一部ご紹介いたします。過去の展示は、文学館ホームページでご覧いただけます。

第1回

家族の絆と文学への思い



妻キチ、長女晴代、長男哲文、次女鈴江とともに撮った、大正2年頃の家族写真です。明治40年の『愁人』以降、何冊かの小説集を出していた未明でしたが、その浪漫主義的作風は自然主義隆盛の文壇に迎えられず、生活は困窮。明治43年には晴代と哲文が栄養不良になりました。しかし作家として立とうとする思いは強く、小説を書きつづけ、明治45年にはネオロマンチズムの先駆者として、『早稲田文学』から〈推讃の辞〉を与えられます。未明には、家族への愛と文学への情熱が、種々の不安を支える太い綱でした。そんな折り、次女鈴江が誕生し、

小春日和の時節にふさわしい束の間の一家団欒が家族を訪れます。写真は、そんな日の1枚であったように思われます。しかし、未明を支えた家族の絆は、後にむざんに断ち切られます。翌3年、哲文が疫病で急逝し、7年には晴代が結核で亡くなるからです。未明文学には、2人の子供の死が大きな影響を与えています。自筆年譜に、未明は次のように記しています。「貧困時代の二児を失うて、悲しみ骨に徹し、はなはだしく鞭打たる。」

「鞭打たる」の言葉には、亡くなった子供の命の分まで文学に生きようとすると強い思いが表れています。童話の執筆が本格化するのも大正7年からです。未明は、家族の写真は何枚か残しています。亡くなった2児のほか、4人の子供の誕生に恵まれ、未明はその子らの成長を楽しみにし、新たな絆を育てていきました。

第3回

最晩年に書かれた童話原稿「ふく助人形の話」



文学館では、小川家から、貴重な未明の生原稿を多数お預かりしています。「ふく助人形の話」が書かれた原稿もその一つです。この童話は昭和32年5月、未明75歳のときに「日本児童文学」に発表されました。短編童話としては、未明の最晩年に書かれたものと推測されます。

この原稿は、400字詰原稿用紙5枚にわたって細字の万年筆、ブルーブラックのインクで書かれています。大きな修正はなく、ひらがなを多用し、全体が書き上げられたあと、修飾語句や敬語表現を書き加えるなどして、言葉づかいの吟味をしています。書きながら、あるいは書いた直後に未明自身が手入れをしたものと思われる。

ふく助人形は、困った人を苦しめ、人のうらみをもってまで金もうけをする人間の、欲望の象徴として登場します。そうした人を未明は、「人間のすることではないと斬って捨てます。」

この話に登場する子供は、小さいころの忘れられない思い出として、ふく助人形の話を書きます。したがって、この子供は、未明自身の子供時代、子供の母やおばあさんは、未明の母やおばあさんとも考えられます。母やおばあさんから教えられたことを、未明は生涯、大切に自分の考えの基とし、童話を書き続けたので

第8回

挿絵の魅力（『小川未明コドモエバナシ』）



『小川未明コドモエバナシ』は、昭和10年1月、東京社より刊行された未明の童話集です。未明童話は、雑誌へ発表される場合も、童話集へ収録される場合も、童話の文章だけが掲載されるより、挿絵が添えられ、文章と挿絵がバランスをもつて紙面を構成することが多かったようです。

この童話集は、「エバナシ」と題されているとおり、絵と話が意識的に組み合わせられた童話集です。本書の装幀は初山滋、口絵は武井武雄、挿絵は初山滋・安泰・深沢省三・武井武雄・川上四郎・前島とも・福田新生・清水良雄の8名が担当しています。収録童話数は55編。カタカナのみ、あるいは漢字カタカナで書かれた、幼年向けのカタカナ童話集です。見開き1頁もしくは2頁程度の短いカタカナ童話に、前述8名のいずれかの挿絵が描かれています。本書は、童話の側から言えば未明のカタカナ童話としての最初の精華集であり、挿絵の側から言えば挿絵画家の個性を競う見本帳となっています。

小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成24年度で21回目を迎え、これまでに延べ9600編を越える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



小川未明文学賞贈呈式

第22回募集要項

◆募集作品

- ・小学3～6年生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。
- ・400字詰め原稿用紙で50枚～120枚
- ・未発表作品に限ります。
- *詳細は左記にお問い合わせください。

◆応募資格

年齢、プロ・アマを問いません。

◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

◆締切

平成25年10月31日(木)(当日消印有効)

◆入選作

- ・大賞1作(ブロンズ像・賞金100万円・副賞)
- ・優秀賞2作(賞金20万円・副賞)

◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、平成26年3月上旬(予定)に本人に直接通知します。

応募・問合せ

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2
上越市文化振興課
「小川未明文学賞担当」
TEL 0256-5260-6900
FAX 0256-5260-6904
E-mail: mimei@city.joetsu.niigata.jp

受賞のひとこと

私は以前、影絵の人形劇団に所属していたことがあり、劇団は全国の小学校を訪ねて巡演していました。レパートリーはさまざまですが、変わらぬ柱は小川未明原作の「赤いろうそくと人魚」でした。

子どもの観客は正直で、上演作品がつまらないとすぐに騒ぎだします。この作品に限っては、そんな心配もいらず、最初から子どもの心を惹きつけました。人魚の娘を売り飛ばした年寄り夫婦のもとへ、人魚の母親が訪れ、赤いろうそくを買う場面になると、会場は静まり返ります。皆が息をひそめ、一心に見入っているようですが、スクリーンの裏側にいる私たちにもひしひしと伝わってきました。

この作品に象徴されるように、未明さんの作品は、この世の無常と理不尽さを描きだし、あらがいがたい運命を感じさせるものが多いように思います。そのあたりが、前近代的で、子どもに与える作品としてはふさわしくないという、一部の批評の元になっているのでしょうか。しかし、ほんとうに、そうなのでしょいか。

私の祖母は明治生まれで、テレビで人が喋るのを、最後まで不思議がっていたような人ですが、口癖に、人は死んでお釈迦さまの前に出たら、誰でも平等なんだよといった。最近では、東北の大震災が示すように、この世には人知を超えた力というものも存在しています。戦前の日本人は、折に触れそのことを感じ取り、いまよりずっと謙虚に、つつましく暮らしていたのだらうと思います。

未明さんの作品でも、ある境遇に生まれついてしまったという運命は、かんたんに変えることはできません。しかし、ただ諦めるのではなく、それが自分の運命なら、よし引き受けてりっぱに生き抜いてみせるという、強い覚悟や矜持をうかがうことができます。それがあからこそ、作品は世代を越えて支持されてきたのでしょいか。

偉大な作家の名前がついた賞をいただけるのは、たいへん名誉なことであり、帰宅して、贈呈されたブロンズ像と向きあうと、あらためて受賞の喜びがわいてきました。賞の運営全体を通して、上越市の方々が、多大な労力を注いでいらっしやることもよくわかり、なおのこと感謝の念にうたれます。

今後とも、賞に恥じない作品を書いていきたいと思っています。ありがとうございました。



第21回小川未明文学賞大賞受賞
〔大賞作品「木かげの秘密」〕

浅野 竜

出張おはなし会

今年度は、小学校5・6年生を対象に多くの学校へ出かけました。

黒川小学校感想文より

「ねずみとバケツの話」で、すごくこわそうだったバケツが、年をとってやさしくなっていたところが心に残りました。



(黒川小学校) グループさくら

吉川小学校、春日新田小学校5・6年生感想文より

- 「赤いろうそくと人魚」
- ・やさしかった人が急に恐ろしい心になったことが不思議。
 - ・人魚のお母さんが自分より子どもの幸を思って、人間の所にやろうと思った事がすごいなーと思った。
- 「月夜とめがね」
- ・おばあさんが女の子の手を治そうと目がねをかけて見たら、ちょっとだった所がおもしろかった。
 - ・メガネ売りが来る所が不思議で、読み方も、おもしろかった。
- 「野ばら」
- ・戦争が無かったら、2人は今でも仲良くくらしていると思う。
 - ・敵、味方、関係なく仲良く出来るってすごいなと思った。
 - ・2人はあんなに仲が良かったのに2つの国が戦争を始めた、2人は敵になった、なんで戦争なんかするのだろう。



(吉川小学校) せせらぎの会

「ある男と牛の話」「赤いろうそくと人魚」のお話を聞いてもらいました。映像や音楽もあり、まるでお話しの世界の中にいるような感じがした、と感想をいただきました。



(里公小学校) グループ空

「野ばら」「月夜と眼鏡」「牛女」の3作品を楽しみました。「牛女」では尺八の生演奏が入り、児童も熱心に聞いてくれ、味わいあるおはなし会でした。(附属小学校)



(附属小学校) 未明童話の会

ぐんま朗読塾との朗読交流会

ぐんま朗読塾(16名)の皆さんは、金子みすず・高村光太郎の作品を。未明ボランティアネットワークは、小川未明作「二度と通らない旅人」を、音楽と映像を入れて朗読しました。その後、それぞれの朗読について感想等を話し合い、交流をしました。



出張おはなし会、会員加入の連絡先
上越市文化振興課

〒943-0832

上越市本町3-3-2

TEL 025-526-6903

FAX 025-526-6904

E-mail: mimei@city.joetsu.lg.jp

のばら

未明ボランティアネットワークだより

vol.9

発行：未明ボランティアネットワーク
発行日：2013年5月31日

平成24年度の活動

- ・小川未明文学館ビックブックシアターおはなし会
全21回、延べ参加者308名
- ・出張おはなし会（小・中学校、放課後児童クラブ、幼稚園、福祉施設等）
40ヶ所、2,302名
- ・特別展おはなし会
- ・ぐんま朗読塾との朗読交流会
- ・会員の研修会



小川未明文学館でのおはなし会

ビックブックシアターおはなし会

毎月第2、第4日曜日の午後2時から、会員が5つのグループに分かれて、本型のスクリーンを使って、未明童話の朗読や紙芝居などを行っています。



10月14日は謙信KIDSスクールプロジェクト「童話の楽校」の子ども達を迎え、「お話の会うさぎ」グループが担当しました。未明童話に関心のある子ども達でもあり、とても真剣に聞いてくれました。未明の作品には初めて接するという子ども達も多い中で、読んだことがあるという子どもも数名いました。未明のお話の世界を一緒に楽しむことができました。

特別展おはなし会 10月28日(日)

- | | |
|---------------|---------|
| 1. ものぐさじじいの来世 | グループさくら |
| 2. ある男と牛の話 | お話の会うさぎ |
| 3. 負傷した線路と月 | グループ空 |
| 4. 研屋の述懐 | せせらぎの会 |
| 5. 羽衣物語 | 未明童話の会 |

5つのグループが、ペープサート、映像、音楽と各自工夫を凝らし練習してきました。合同練習はリハーサルのための厳しい状態でしたが、課題であったグループ交代時のつなぎをスムーズにできるよう、作品の紹介や人の動線を確認しあいました。



● お知らせ ●

小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただけますと幸いです。

【主な収集資料】

1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

平成25年度 小川未明文学館カレンダー

- 4～6月 朗読研修会
4月26日・5月24日・6月21日
- 8月 特別展 未明童話絵本原画展
*各種イベントを開催
- 10～11月 文学館講座 3回
童話創作講座 入門コース 2回
実践コース 1回
- 10月 小川未明文学賞締切 31日(木)
- 10～12月 謙信 KIDS スクールプロジェクト「童話の楽校」
- 3月 小川未明文学賞贈呈式

* 通年で、所蔵品紹介の小展示を行っています

未明ボランティアネットワークによるおはなし会

* 毎月第2・4日曜日午後2時から文学館にて開催

* 学校等での出張おはなし会を随時開催

小川未明文学館のご利用案内

開館時間

火～金曜日 午前10時から午後7時
（6月から9月の間は午後8時まで）
土・日・休日 午前10時から午後6時

休館日

毎週月曜日（休日の場合はその翌日）・休日の翌日・館内整理日（毎月第3木曜）・資料整理期間
年末年始（12/29～1/3）

入館料 無料



問合せ

〒943-0835

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

URL <http://www.city.joetsu.niigata.jp/>